第40回記念定期演奏会　名古屋公演

水星交響楽団

指揮　齊藤栄一

ドヴォルザーク　交響曲第9番　ホ短調　作品95　「新世界より」
Antonín Dvořák　Symphony No.9 in E minor, Op.95 “From the New World”

ストラヴィンスキー　バレエ音楽「春の祭典」
Igor Stravinsky　Le Sacre du Printemps (The Rite of Spring)

2008年10月12日（日）　13：30開演

愛知県芸術劇場コンサートホール

後援　社団法人如水会名古屋支部・オストメールフィルハーモニカー

ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

当楽団は、一橋大学管弦楽団の若手 OB・OG によって 1984 年に設立され、以来、今日に至る約 25 年の間に、39 回の定期演奏会及び室内オーケストラ作品中心のチェンバーシリーズと題した演奏会や、バレエ団との共演など、主に東京都内のホールにて演奏活動を行ってまいりました。

団名である「水星」は英語では「Mercury」であり、ローマ神話での商業の神メルクリウス「＝ Mercury」の持つ杖が一橋大学の校章になっていることと、宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」に出てくる「金星音楽団」などを掛け合わせております。

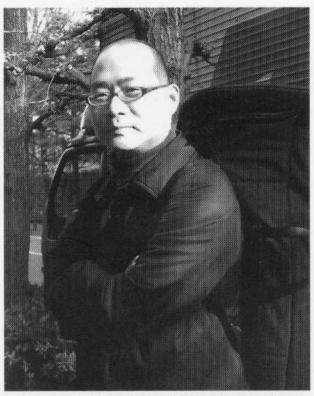
一橋大学は、新宿から JR 中央線で約 30 分のところにある東京西部三多摩地区の学園都市国立市にあります。国立市自体が一橋大学を中心とした計画都市であり、多摩の非常に緑豊かな環境のなか、大学を出て何年にもなるメンバーが日曜日になると学生のときと同じように大学オケの部室に集まり練習を行っております。

大学 OB オケはほかにもたくさんあると思いますが、未だに大学オケの練習場で練習している団体はおそらくあまりなく、当団の大きな特徴となっております。しかも、メンバーの住まいも種々に分かれているにもかかわらず、片道 1 時間以上かけて練習にくるのは、やはり、国立という街の魅力もさることながら、長年にわたる様々な世代との音楽交流のゆえではないかと感じます (今回の名古屋公演にも、大勢の現役オケメンバーが参加いただいております)。

さて、今回の定期演奏会は 40 回という節目となります。加えて約 25 年という時を経て、更に飛躍した活動を行うべく、今般、様々な方々のご協力を得て、名古屋での演奏会を実現することができました。しかしながら、普段、東京で活動しているオーケストラがなぜ名古屋でとお感じの方は多いと思います。実を申し上げると、私は 4 年ほど前まで名古屋近郊に勤務しており、このコンサートホールでの演奏会に何回か出かけたことがあり、また、実際に演奏する機会にも恵まれました。その際に特に印象に残ったことが、聴く立場でも演奏する立場でも、その音響が非常に温かく感じられたことでした。その音響は、在京の様々なホールと比較しても全く遜色ない、いやむしろそれ以上であり、40 回記念演奏会の企画に際し「是非ともこのホールで演奏してみたい」ということを団員に話したところ、全員一致で方針が決まったというわけなのです。

いまや経済だけでなく文化的にも日本を牽引しつつある中部地区の息吹を感じながら、団員一同精一杯の演奏を致します。本日はごゆっくりお聴きください。

最後になりましたが、今回の公演に際し、多大なご後援をいただきました社団法人如水会名古屋支部の皆様、東海学園交響楽団及びオストメールフィルハーモニカーの皆様をはじめ、ご支援ご指導賜った皆様に厚く御礼申し上げます。



水星交響楽団運営委員長
植松隆治

プログラム

ドヴォルザーク
交響曲第９番　ホ短調　作品 95　「新世界より」（約 45 分）
Antonín Dvořák　Symphony No.9 in E minor, Op.95 “From the New World”

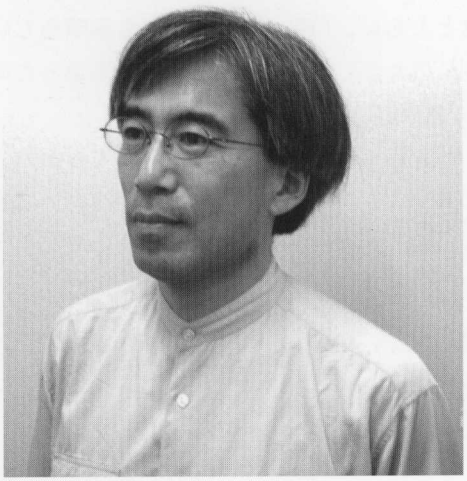
―休　憩―

ストラヴィンスキー
バレエ音楽「春の祭典」（約 34 分）
Igor Stravinsky　Le Sacre du Printemps (The Rite of Spring)

水星交響楽団（すいきょう）／演奏

1984 年、一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成。モーツァルト、ブラームス、ベートーヴェンなどの名曲はもちろんのこと、マーラー、ショスタコーヴィチ、ストラヴィンスキーらの大曲、アマチュアでは滅多に取り上げられることのないバルトーク「中国の不思議な役人」（全曲版、もちろん合唱付）、ラベル「ダフニスとクロエ」（全曲版、合唱、しかもバレエ付）まで、幅広いレパートリーを誇る。

熱気あふれる演奏で、観客に想定外の感動を与えます。絶対損はさせません！



齊藤　栄一（さいとう　えいいち）／指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981 年には、京都大学交響楽団と共に２週間に渡りドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。1982 年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第９回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

1984 年より、水星交響楽団の常任指揮者に就任。1995 年には東京文化会館で水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団、佐多達枝バレエ団と、完全舞台形式「カルミナ・ブラーナ」、ラヴェルの舞踊交響曲「ダフニスとクロエ」全曲を指揮。「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演で、神奈川フィル、東京シティ・フィルを指揮したこともある。2005 年、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」３部作（４台のピアノと打楽器）を指揮した。

明治学院大学文学部芸術学科教授。

曲目紹介

ドヴォルザーク

交響曲第9番　ホ短調　作品95　「新世界より」

Antonín Dvořák　Symphony No.9 in E minor, Op.95 “From the New World”

心に浮かぶ原風景

アントニン・ドヴォルザークは、スメタナとともにチェコを代表する大作曲家。19世紀後半に活躍し、9つの交響曲とともに、多くの管弦楽曲や室内楽、声楽曲などを作曲しています。数多くあるドヴォルザークの作品の中でも、今回演奏する交響曲第9番『新世界より』はとりわけ有名。特に2楽章のメロディは、クラシックを全くカジっていない読者の方でも、夕飯だからオウチに帰る気分になることは必至でしょう。「新世界」というのは、生粋のチェコっ子であるドヴォルザークにとってのアメリカ。50歳を過ぎてから、この「新世界」に招かれ、音楽教育に貢献しつつ、自身の作曲活動も円熟を極めます。この地でドヴォルザークはチェロ協奏曲や弦楽四重奏第12番『アメリカ』など数々の傑作を完成させるのです。

もともとドヴォルザークが遠いアメリカに渡ったのは、ニューヨークのナショナル音楽院の設立に尽力したジャネット・サーバー夫人の熱心な誘いによるものでした。当時はコロンブスが大西洋を渡って400年、独立して100年と、ヨーロッパの他の国に比べて圧倒的に歴史の浅いアメリカ。そんな国の中で、彼女は「アメリカ楽派」の確立を図り、チェコにおける偉大な先駆者、ドヴォルザークを招いたとされています。誰にだって故郷があります。心に思い浮かぶ原風景。幼い頃の思い出。しっとりと昔を懐かしむときに、自然と頭を流れるメロディをサーバー夫人は作り出してほしかったのかもしれませんね。

ドヴォルザークの生家

こうしてボヘミアの肉屋の息子からニューヨークで音楽学校の校長先生にまでなったドヴォルザーク。アメリカに着くとすぐに『新世界より』を作曲しました。この副題には、「故郷ボヘミアへの、新世界アメリカからのメッセージ」という意味合いがあるわけです。この『新世界より』には、もちろん、彼の原点であるボヘミアの音楽は十分に生かされていますが、一方でドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌を取り入れたと言われています。彼自身「この国の未来の音楽は黒人たちの歌を基礎に作られるべきだ」と述べたといわれ、非常に強い関心を持っていました。それをすぐに交響曲に取り入れた事実からみるに、ドヴォルザークが副題にこめた想いは、「故郷が懐かしいよ～(泣)」という懐古の念とともに、「遠いアメリカにも素晴らしい音楽があるんだよ☆」という前向きな精神もあったのではないかと想起してしまいます。

初演は1893年12月、ニューヨークにて行われ大成功を収めました。第2楽章が終わった時点で聴衆から割れんばかりの拍手が起きて、その場にいたドヴォルザークが挨拶を返したっていうのだから、その反応は上々だったのでしょう。その後はクラシックを代表する名曲として、現在でも世界中で演奏されています。

第 1 楽章　Adagio - Allegro molto

ゆったりと散歩するような中低弦の旋律で感傷的に始まります。クラリネットやホルンの信号的な動機に続き、再び弦の旋律が戻ってくると、突如として荒々しく低弦とティンパニ、クラリネットが咆哮する。盛り上がった後一旦静まり、アレグロの主部に入ります。ちなみに、この楽章の第 2 主題、フルートとオーボエによって提示される旋律は、黒人霊歌との関連が指摘されています。

第 2 楽章　Largo

管楽器によるコラール、ティンパニの鳴動の後、イングリッシュ・ホルンによる有名な旋律が奏されます。5 時になったので帰りたくもなるところですが、曲は

さらに深い哀愁を帯びていきます。実はチューバはこの楽章のみの登場となります…。これは、初演当時のニューヨーク・フィルのバス・トロンボーン奏者の腕が悪かったとか、そもそも団員がいなかったとか、色々と諸説あるようです。

第 3 楽章　Scherzo (Molto vivace)

速いテンポのスケルツォ楽章で、ボヘミア風の民族色が非常に強い楽章です。全体は 2 つのトリオを持ち、特に主部の 3 拍子の 2 拍目から始まるリズム型が印象的です。中間部のトリオは舞曲風の非常にさわやかなものとなっています。この楽章のみトライアングルが登場します。

第 4 楽章　Allegro con fuoco

弦楽器による強烈に印象的なイントロ。実は鉄道の発車音を表現しているといわれているらしい。さすが鉄道オタのドヴォルザーク。ホルンとトランペットによる第 1 主題の提示は非常に有名な部分かと思います。

シンバルの一打の後、クラリネットによって感傷的に第 2 主題が奏され、その後は各楽章の旋律と主題が絡みながら、全オーケストラによる強烈なフィナーレを迎えていきます。

****

神奈川県の茅ヶ崎出身である私にとってのドヴォルザーク的存在はサザンオールスターズ。故郷に帰ると『チャコの海岸物語』を聴きながら「エボシ岩」を眺める「茅ヶ崎スタイル」を毎年欠かさずやってきました。なのに！記念すべき 30 周年に活動停止だなんて…。今年は泣きながらエボシ岩を見るはめになってしまいました (泣)。チェコの国民が、アメリカからドヴォルザークが帰国して歓喜に沸いたように、サザンが茅ヶ崎に帰ってくることを夢見ることにします。…てなんか変な終わり方 (苦笑)。

湘南のシンボル「エボシ岩」

(祝！初ティンパニ♪　記)

★水響演奏史　話題を呼んだ演奏会をピックアップしました！　その 1

▼ 1 回 (85 年) シューベルト「ロザムンデ」序曲、ラヴェル「マ・メール・ロワ」組曲、ブラームス交響曲 2 番　▼ 4 回 (87 年) モーツァルト「劇場支配人」序曲、ベートーヴェン交響曲 9 番　▼ 8 回 (89 年) マーラー交響曲 2 番「復活」　▼ 10 回記念 (90 年) ワーグナー「トリスタンとイゾルデ」から「前奏曲と愛の死」、マーラー交響曲 5 番　▼ 12 回 (91 年) バーンスタイン「キャンディード」序曲、ガーシュイン「ポーギーとベス」、バーバー弦楽のためのアダージョ、ウィリアムズ「スター・ウォーズ」組曲

曲目紹介

ストラヴィンスキー

バレエ音楽「春の祭典」

Igor Stravinsky　Le Sacre du Printemps (The Rite of Spring)

芸術のかたち

芸術とはなんだろうか？この問いへの答えは到底私には出せない。ただ、人々に何かを感じさせるものであって、権威のある偉い人が「これは芸術です」と声高らかに宣言した瞬間にそれは芸術になるんじゃないかと思う。私自身も、「へー、そうなんだ」といって素直にそう思ってしまうであろう。つまり、芸術には様々な形が存在しうる（当然、私の理解の範疇を逸脱するものも含めて）ということだと思う。

今回演奏するストラヴィンスキーの「春の祭典」は、「ペトルーシュカ」「火の鳥」と合わせ、三大バレエと言われているが、この大曲も初演当時はその前衛的な音楽及び踊りゆえに賛否両論であった。１９１３年の初演においては、演奏中に賛成派と反対派が殴りあいの大騒動を引き起こし、バレエの舞台上はオーケストラの音楽さえ聞こえず、振り付け師が舞台袖でダンサーたちに向かって大声で拍子を数えていたという逸話が残っているほどである。また、新聞には「春の虐殺」という見出しが付くという笑えない状況であったという。もちろんのちの再演の際には拍手と賞賛を与えられ、現在は「現代音楽の古典」といわれるほどの名曲として扱われているということは言うまでもない。

今では現代音楽が好きになった私も、初めてこの曲を聴いたときの衝撃を覚えている。当時、ベートーヴェンやブラームスが大好きで古典派やロマン派の音楽にどっぷりだった私に先輩が「オーケストラを続ける上で避けて通れない名曲だ」とおっしゃるので聴いたのがきっかけである。初めて聴いた感想は「軽くパニック」であった。複雑な拍子や和音に翻弄され、まるでサルトルの「嘔吐」の世界である。（もちろん今は大好きな曲ですよ！）

この超名曲「春の祭典」の解説に移ろう。この曲は２部構成になっており、それぞれ数曲により成り立っているがそれらの曲は途切れなく演奏される。もちろんバレエ曲であるため、ストーリーも存在する。それぞれの話は以下の通りである。

****

第１幕　大地礼讃

春の賛歌。大地はふたたび花と草に覆われ、人々は喜びに満たされて踊る。人々はグループを作って遊び戯れ、「誘拐の遊戯」なども行われるが、長老（賢者）の登場により中断される。長老は大地に口付けし、人々が春に酔いしれ、踊り狂ううちに幕が下りる。

1. 序曲
2. 春のきざしと若い娘達の踊り
3. 誘拐の遊戯
4. 春のロンド
5. 競い合う部族の遊戯
6. 賢者の行進
7. 大地への讃仰
8. 大地の踊り

ストラヴィンスキー

第２幕　いけにえ

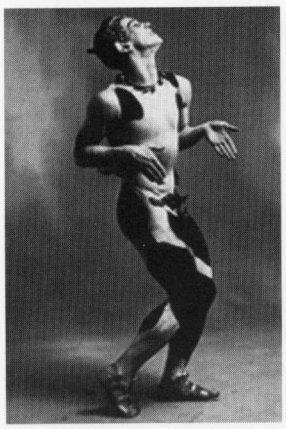
聖なる丘の上で、娘たちが神秘的な遊戯を行い、そ

のうちの一人が太陽神ヤリーロに捧げられる生贄に選ばれる。娘たちは激しく踊り、選ばれた処女を祝福するが、長老に呼ばれ生贄の乙女ひとりを残し立ち去る。生贄の乙女は長老たちが見守るなか、最後の「聖なる踊り」を踊り、息絶える。

1. 序曲
2. 若い娘達の神秘な踊り
3. 選ばれた乙女への讃美
4. 祖先の霊への呼びかけ
5. 祖先の儀式
6. いけにえの踊り

****

「春の祭典」の特徴といえば複雑なリズムと不協和音(注1)であろう。初めて譜面を前にし、楽器を構えたとき、その複雑怪奇なおたまじゃくしの羅列により鼻血が出そうになったのはつい半年前である。その後、「さらう(注2)より読み込み」という方針へ切り替えたものの、スコアを見ながらでも落ちる(注3)という非常事態が発生する。仕方がないので「とにかく聴く」というスポ根さながらの方法を採用。その後は徐々に慣れ、かっこいいそして神秘的な不協和音のツボも掴み始める。しかし、耳で聞いていると1拍目に聞こえる音も、実は2拍目である等の難所においては「指揮を見ると落ちる」というオケメン(注4)として最低の状況に陥る。当然、各方面から非難の嵐であったため、さらなる譜面の読み込みに邁進したことは言うまでもない。


振付師ニジンスキー

また、慣れれば寝てても落ちないというような明快な曲と違い、7／4拍子や11／4拍子なども存在する春の祭典では灼熱の部室(注5)での練習中に強烈な飲酒欲(注6)に駆られ、少しでも集中力をそぐようならば最後、「あれ？今何拍目だっけ？」という状況に陥り、ドッペル(注7)が発生するという実にスリリングな曲である。

しかし、そこは百戦錬磨の水響である。持ち前の集中力を存分に発揮することでこの大曲をまとめあげることに成功し、現在に至るわけだ。

さあ、もう言葉はいりません。音楽界に＜ニューワールド＞を提示し、新たな芸術のかたちを確立した極大編成の名曲をお楽しみください！

（Ya－Mahler）

(注1) 不協和音
調和しないこと。お互いに相容れない様子の比喩としても用いられることがある。しかし、クラシックにおいては頻繁かつ効果的に使われることが多いため、団員にとっては「かっこいいもの」「気持ちいいもの」として認識されている。

(注2) さらう
練習すること。誘拐とは無縁。

(注3) 落ちる
曲の流れからはじき出され、今どの音を弾いてよいかわからなくなること。団員としてはとてつもなく不名誉なこと。

(注4) オケメン
オーケストラの団員のこと。女性であってもオケメンと呼ばれる。イケメンとは無関係であることが多い。

(注5) 灼熱の部室
練習場所である一橋大学管弦楽団の部室。冷房が壊れているかつ窓は締め切りの状態を維持するため夏場は地獄と化す。

(注6) 飲酒欲
酔狂もとい水響の団員は飲酒欲が強く、中には本番前に一杯飲むというパートがあったとかなかったとか。本番中にステージ上へ缶ビールを持って上がり、飲みながら演奏したためホール側から出入り禁止を言い渡されたオケがあるそうだが、当団体とは無関係であることをお断りしておく。

(注7) ドッペル
弦楽器のような全員で同じ音を発するパートにおいて発生する現象。正しい音を「間違ったタイミング」で出すことにより得られる演奏効果。休符を数え間違えることにより発生することが多い。事故ともいう。静寂な場面でこれをやることにより事故から事件へと昇格し、オーケストラを台無しにする。

★水響演奏史　「カルミナ・ブラーナ」バレエ＋合唱公演に挑戦

その2

▼14回(92年)エルガー　チェロ協奏曲(独奏:金谷昌治)、ホルスト「惑星」　▼16回(93年)マーラー交響曲3番　▼17回(94年)シューマン交響曲3番、ドビュッシー「夜想曲」、ストラヴィンスキー「春の祭典」※サントリーホール初進出　▼18回(94年)ドヴォルザーク序曲「謝肉祭」、チャイコフスキー「白鳥の湖」より、バルトーク管弦楽のための協奏曲　▼特別定期(96年)モーツァルト交響曲38番「プラハ」、R・シュトラウス「七つのヴェールの踊り」、オルフ「カルミナ・ブラーナ」※前年末に「カルミナ・ブラーナ」バレエ公演で東京文化会館のピットで演奏

やっとかめ 名古屋の皆さん

若槻　「皆さんこんばんは。日曜の夜９時、水響アワーの時間です。今日は水星交響楽団２回目の演奏旅行[※1]となる名古屋公演の模様をお送りします。ゲストには水響中部支部 初代支部長で、クラリネット奏者の横地さんをお迎えしております。横地さん、よろしくお願いします」

横地　「こんばんは。横地です。名古屋の皆さん、やっとかめ！[※2]」

若槻　「あら、いきなり名古屋弁でありがとうございます。名古屋にはいつ頃いらっしゃったのですか？」

横地　「1995年から1996年にかけて、１年半くらい。平日は八事の寮から大須の会社[※3]へ通い、週末は東京に戻って練習に出てました。遠距離通団ですね。もう12年も前になるんだなあ。名古屋の駅前もがらっと変わりましたね」

若槻　「横地さんは遠距離通団の草分け的存在だそうですね」

横地　「そうなんです。私の後に、チューバの植松さんが名古屋から通いました。２代目中部支部長ですね。さらに、フルート川崎さんの京都が続き、今は打楽器の高橋さんがなんと岡山から通ってます。植松さんはいったん東京に帰りましたが、最近また大阪に転勤になって、尼崎から通ってますね」

若槻　「皆さんすごいパワーですね。それにしても、みんな名古屋か、名古屋経由の西方面なんですね。遠距離の皆さんの共通項が名古屋ということで、今回の演奏旅行になったんですね」

横地　「団員では、クラリネットの重鎮、西村さんが犬山出身だし、不定期団員（？）まで含めれば、今回お世話になっているヴァイオリンのぴろしさん（永世中部支部長）、同じくヴァイオリンのインコバさん、打楽器のとどさん、チューバの道玄さんといった、かなり濃いメンバーが、名古屋に縁があってみえる。もちろん若い人にも名古屋人がいると思いますけど、私ももう古株団員だで、わかりゃあせんがね」

若槻　「名古屋人の話題で、横地さんの名古屋弁も滑らかになってきました」

横地　「失礼。懐かしい名前[※4]に思わず興奮してしまいました。
…おっと、それに若槻さんを忘れちゃいけない。若槻さんも名古屋出身で、しかも、ふだん番組では『ヴァイオリンが趣味です』くらいしかおっしゃらないが、実はこの水響で弾いてみえるじゃないですか。今日の演奏には出てみえるんですか？」

若槻　「いえ、今回は業務多忙で、残念ながら出られませんでした……また沼辺先生にいじられるので、その話題は置いときましょう。ところで横地さん、名古屋で印象深かったことと言えば何ですか？」

横地　「やっぱり、まず名古屋弁ですね。あと、食文化と、テレビCM。そのほかにもいっぱい魅力がありますが、ここでお話しするよりも、つボイノリオの『名古屋はええよ！やっとかめ』[※5]を聞いてもらった方が的確ですね。ぜひ聞いてみてください。すごい曲ですから」

若槻　「それでは、私もアナウンサーとして関心のある名古屋弁から、教えていただけますか」

横地　「名古屋弁といえば『みゃあみゃあ』が代名詞ですが、それだけじゃないんです[※6]。今日は僕が名古屋に来たとき、最初にあれっ？と耳に引っかかった言い回しを、いくつかご紹介しましょう。
まず、名古屋では名古屋のことを『なごや』と言わないんです。『なごや』って言うんですね」

若槻　「？？」

横地　「アクセントの位置です。こちらでは『なごや』と『ごや』にアクセントを置いて、尻上がりに発音する。面白いのは、名古屋の人も東京に行くと『なごや』と発音するんです。『なごや』は名古屋地域限定の現象なんですね」

若槻　「ああなるほど、そう言われてみればそうかも」

横地　「あと、尊敬語の『いらっしゃる』の意味で、『みえる』を多用します。これは、今日僕もすでに何度か使っていますから、見直してみてください。外来人（？）からすると違和感がありますが、指摘すると『とろくせゃあこと言っとってかんわ。標準語だがね』と、よくムッとされました」

若槻　「食文化については？」

横地　「ひつまぶし、味噌煮込みうどん、手羽先唐揚げ、あんかけスパゲティ、冷し中華にマヨネーズなど、挙げたらきりがありません。肩肘張らずに楽しめる、庶民派B級グルメの聖地という印象ですね。忙しい方におすすめは、名古屋駅の新幹線下りホームの最前部にある、立ち食いきしめんスタンド。これは美味い！東京の方、出張のときに試してみては？
あと、朝、喫茶店に入ってコーヒーを頼むと、黙ってあずきトースト、ゆで卵、豆菓子がついて来たのにもびっくりしました。モーニングサービスをタダでやってるんですね。夕方までモーニングをやってるお店もあるんですよ」

若槻　「あはは、夕方までモーニングとはこれ如何に、ですね。最後にテレビCMについてですが、そろそろ演奏の時間が近づいてきてしまいました…。そもそも、公共放送でオンエアできるんでしょうか」

横地　「事実だで流さないかんでしょう。今でもやってるかわかりゃあせんけど、インパクトの強いコピーがようけあったで、まあどんどん出てきて止められゃあせんよ。さあ、行こみゃあて！

- 『コメ兵（こめひょう）』の『いらんもんはコメ兵で売ろう！』※7 とか、
- 『アサヒドーカメラ』※8 の『今金中夕（こんきんちゅうゆう）』『行ーかないーかん、行かないかん、行かな行かないかん♪』※9 とか、
- 『美宝堂』の『名古屋清水口の美宝堂へどうぞ！』※10 とか、
- 『赤福』※11 の……」

若槻　「そ、そろそろ本当に、演奏の時間になってしまいました。横地さん、ありがとうございました。それでは、齊藤栄一さん指揮、水星交響楽団で、ドヴォルザークの交響曲第9番『新世界より』、ストラヴィンスキーのバレエ音楽『春の祭典』、2曲続けてお聴きください」

（横地 篤志）

■ 本文は「N響アワー」のパロディー。本物の司会は岩槻アナで当楽団の団員です。設定はフィクションですが、内容はほとんどノンフィクションです。

※1　第1回の演奏旅行は2001年11月4日、長野市の長野県県民文化会館大ホールで行われた。今回は実に7年ぶりの演奏旅行となる。
※2　「お久しぶり」の意味。
※3　八事とは、名古屋市昭和区にある地名で、閑静な住宅地。大須とは、名古屋市中区にある地名で、ビジネスと下町系ショッピングの中心地。
※4　内輪ネタでごめんなさい。
※5　つボイノリオは、名古屋が生んだ国民的マニアックシンガー。ちなみに筆者の故郷である埼玉でも、さいたまんぞう が『なぜか埼玉』というご当地ソングをリリースし、局地的に大ヒットとなった。
※6　名古屋弁についての詳細は、例えば清水義範編著『笑説 大名古屋語辞典（でゃあなごやごじてん）』（1994年、学習研究社）を参照。
※7　「コメ兵」は大須に本店のあるリサイクル・ディスカウントストア。最近は東京や大阪にも進出している。
※8　中区栄にあるカメラ店。当時は矢場町のパルコの横にあった。
※9　「今金中夕」は「今週の金曜日の中日新聞の夕刊の広告を見てください」の意味。「今金中夕」がタンゴのリズムに乗って繰り返され、聞く者の潜在意識にまとわりつく。また「行ーかないーかん」では、2匹のイカが音楽に乗ってラインダンスをしながらこのセリフを連呼する（ように記憶している）。
※10　「美宝堂」はジュエリーショップ。社長自らが「名古屋清水口の美宝堂へ」と語りかけるこのCMは、深夜帯を中心に非常に頻繁に流されており、東海地方では知らない人はいない。
※11　ご存知伊勢の「赤福」は名古屋でもCMが流れている。始まってしばし無音状態が続き、終わり間際に突然「赤福もちはええじゃないか♪」という決めが入る。当時は紙芝居のような静止画ローカルCMで、東京でそのようなCMを見たことのなかった筆者に強い印象をもたらした。

★水響演奏史　初進出！オペラシティ公演が超満員に

その3

▼20回記念（96年）バーンスタイン管弦楽のためのディヴェルティメント、マーラー 交響曲6番「悲劇的」※オーチャードホール初進出　▼チェンバーシリーズ第1回（97年）ヒンデミット「金管と弦のための演奏会用音楽」、ミヨー「世界の創造」、モーツァルト交響曲35番「ハフナー」　▼23回（98年）コープランド「エル・サロン・メヒコ」、ラヴェル「左手のためのピアノ協奏曲」（独奏：若林顕）、R・シュトラウス アルプス交響曲　※オペラシティ初進出　▼24回（99年）デュカス「魔法使いの弟子」、チャイコフスキー「ロメオとジュリエット」、ラヴェル「ダフニスとクロエ」全曲　※2度目のサントリーホール　▼25回（同）ガーシュウィン「パリのアメリカ人」、マーラー交響曲7番「夜の歌」※東京芸術劇場初進出

あんときの

■ わずか 26 人が今回も

14 年前、水響の第 17 回定期演奏会が行なわれた時、私は盛岡で働いていた。その時に出演し、今回も舞台に立つメンバー (敬称略) は、バイオリンは尾崎、野村、鈴木尚、徳地、前田、ビオラ堀切 (旧姓野崎)、チェロ橘、能岡、コントラバス大西、刈田、西永、オーボエ野口、クラリネット西村、横地、ファゴット冨井、ホルン伊集院、小松、山形　トランペット岩瀬、桜井、トロンボーン桜井、高橋、チューバ植松、打楽器山本、高橋、渡辺 (旧姓横田)。たったの 26 人と、時の流れが感じられる。

この定演は「10 周年記念」「初の東京・多摩地区以外での開催」「サントリーホール初進出」など、計 40 回の定演の中でも最も重い意味を持つ。果たして、何が行なわれ、私たちは何をつかんだのか？　当時の資料、証言を元に検証しよう。

■「いつか春祭をやる会」の暗躍

まずはなぜ「春祭」だったのか？「確か、さつきさんが興満新報で『春祭やろう』キャンペーンやってて、そんじゃやってみっかという感じで決まったような記憶がある」と話すのは植松隆治委員長。「興満新報」とは、当時の団内世論を作っていた団内報「水響興満新報」のこと。さつきさんとは、副編集長だったファゴット奏者の渡辺さつきさんだ。

同新報を読み返してみると、1992 年 8 月号の欄外に「いつか春祭をやる会」なるロビイスト集団が登場し、「投票用紙には『春祭』『春祭』をお書きくださいますよう、お願い申し上げます」と選曲会議での投票を呼びかけている。他の記事は「元委員長茂本直人氏元気に一時帰国」「残留確定の S さん統一教会入信を表明」「おめでとう水戸泉」といった柔らかめの話題ばかり。そんな中、同会の主張の先鋭さが分かる。

当時の水響は、マーラーの 2、4、5 番、ホルストの「惑星」をメーンにした演奏会を成功させて誰もが「どんな曲でもやれる」と自信を持っていたのだろう。このアジテーションが、団員たちに「次は春祭」という目標を抱かせたことは想像に難くない。ただし、熱が高まり過ぎたのか。翌 9 月号には「選曲法に抵触する表現がありました」として「お詫び」と、渡辺副編集長が減俸 3 か月の処分を受けたことが報じられている。

■ 春祭・愛で一体感　大慰安旅行も企画

その後は選曲会議の動向、練習の様子を伝える記事は一切出てないが、本番直前の 94 年 1 月号では「水響大慰安旅行 3 月 19、20 日伊豆に決定」なる記事が出ている。旅行の目的は「水響創立 10 周年とサントリーホールでの春祭大成功記念」とのこと。打ち上げをやらずにはいられないほど、春祭への愛が団内に一体感を作っていたのだ。

具体的にはどんな練習が行なわれていたのだろう？

「特に変拍子のところを、遅いテンポで何回も繰り返し、みんなで一緒に身体で覚えるというような形で練習しました」と指揮者の齊藤栄一さん。「団員の中には仕事中に『いけにえの踊り』のリズムを無意識のうちに口ずさみ同僚の奇異の目にさらされたと聞きます」とまた、公演プログラムで植松委員長は明かしている。今回の演奏会同様、変拍子には大いに苦しんだようだ。ただし、「やってみると意外に出来上がりのスピードが速かったので安心しました」と齊藤さん。

■ スター奏者も無名の若手だった

かくして本番だ。公演プログラムの植松委員長による挨拶文からは様々な感慨が読み取れる。「組織的にも音楽的にも若干ながら成長してきた 10 年間」「常任指揮者の齊藤栄一先生が本業の美術史研究のため 1 年間渡英される」「齊藤＝水星交響楽団の 10 年間の総決算」といった具合に。また、団員名簿の正誤表にも時代が感じられる。「前田哲→前田啓」。すなわち、第 2 ヴァイオリンの前田アルファ氏の名前が誤表記されているのだ。“黒い呪術師”“爆音ヴァイオリニスト”と呼ばれる水響の大スターも当時は無名の新人だったのである。

「春祭」

1994年2月6日
サントリーホール

■ 響きに身を任せられるサントリーホール

初めて立ったサントリーの弾き心地はどうだったのだろう？　齊藤さんの述懐を聞こう。

「サントリーホールには、ガラス製の湾曲した反響板がステージの上からいくつも吊り下げられています。それを下から見上げると、今自分の振っているオーケストラの姿がすべての反響板にもれなく映し出されているのが見えます。リハーサルのときに、響きをチェックするような振りをして、それを見上げながらオーケストラの響きに身を任せるとき、最高の気分になりました」

「もっとも、本番のときは、そんなことをしている余裕はありません。むしろ、本番のときは、金管楽器や打楽器の諸君に合図を送るとき、指揮者の正面にあるP席のお客さんと眼があったりすると、気恥ずかしさを憶えます」

「ヒヤッとした瞬間のない演奏会のほうがめずらしいくらいなので、このときもいろいろありました。具体的な箇所は秘密です」

■ 燃え尽きた？齊藤さん

ただ、当時のビデオを見直すと、ヒヤッと感じる部分は驚くほど少ない。冒頭でさつきさんも超難しいファゴットを難なく吹ききり、誰もが美しく不気味な和音を奏で、迫力のある音で複雑なリズムに見事に乗っているのである。問題の終盤の変拍子の連続でも「ポコッ」と飛び出す人は皆無だ。ただ、第一部最後の「大地の踊り」はかなりスリリングだが。

振り終えた後、齊藤さんは燃え尽きたようだ。当時のコンマス・福島秀哉さんと握手をすると、福島さんの肩に一瞬、顔をうずめる。そして、娘のすみれさん、桃子さんから花束を贈呈されて、心からの笑顔を見せた。

■ 打ち上げ、熱川バナナ・ワニ園でも

終演後、各種の打ち上げは記録的に盛り上がった。「2次会でサントリーホールのそばで飲んでたら、ベルリンフィルのバイオリンとビオラ奏者と意気投合して記念撮影もしたはず。名前はえっと・・・ライナー・クスマウルさんとウォルフラム・クリストさん！」と話すのはバイオリンの野村国康さん。そして、1ヶ月後の大慰安旅行では、「熱海のお宮の松」「熱海秘宝館」「熱川バナナ・ワニ園」を巡り、夜は温泉（超音波付き）に入り、豪華舟盛りに舌鼓を打ち、「業界対抗クイズ合戦」で朽ち果てたようだ。

最後に付け加えたいのは、40回定期では、「春祭」のほかに、シューマンの「交響曲三番」、ドビュッシーの「夜想曲」を演奏し、しかも、アンコールでサティの「ジムノペディ」1番、にプロコフィエフの「ロミオとジュリエット」の中にある難曲「タイボルトの死」まで弾いている。おそらく、当時の水響は演奏にも全力、打ち上げにも全力で臨んだのだろう。この水星交響楽団を楽しみ尽くす熱意を、40回を契機にぜひとも見直したいものだ。

祐成秀樹　http://blog.yomiuri.co.jp/popstyle/

その4

★水響演奏史　「中国の不思議な役人」「大地の歌」を連続演奏！

▼27回(00年)マーラー交響曲2番「復活」　▼29回(02年)バーンスタイン「スラヴァ！」、バルトーク　ヴィオラ協奏曲(独奏：坂口翼)、マーラー交響曲5番　※長野演奏会も開催　▼30回記念(同)ラヴェル「道化師の朝の歌」、モーツァルト交響曲41番「ジュピター」、ショスタコーヴィチ交響曲7番「レニングラード」　▼33回(04年)ストラヴィンスキー「ペトルーシュカ」、ブルックナー交響曲9番　▼36回(06年)ガーシュウィン「キューバ序曲」、バーバー　ヴァイオリン協奏曲(独奏：田野倉雅秋)、コープランド交響曲3番　▼37回(07年)バルトーク「中国の不思議な役人」、マーラー交響曲「大地の歌」

水星交響楽団

◆常任指揮者
齊藤栄一

◆コンサートマスター
米嶋龍昌

◆トレーナー
木村康人
佐藤雄一
山田裕治

◆第一ヴァイオリン
岩田　遙
大木多朗
久米浩介
鈴木尚志
鈴木　牧
鈴木真由子
鈴木美沙
高橋　廣
滝澤　蘭
西端雄一
福居由花
宮川妙子
宮川雅裕
山田悠介
祐源　蘭
米島龍昌

◆第二ヴァイオリン
後藤由布
祐成秀樹
鈴木崇洋
鈴木理恵
高橋知華
土屋和隆
都原奈央
徳地伸保
西沢　洋
野口直美
前田　啓
益子　一
水越ゆかり

◆ヴィオラ
有井　晶
井上　拓
太田文二
小笠原裕子
尾崎正峰
小松　聡
瀬戸里稲
田中裕子
林　昌弘
松本祥世
三上さやか

◆チェロ
今村文子
上竹原修一
川端響子
北岡正英
鈴木皇太郎
高橋幾多郎
高橋麻衣香
小牧　愛
橘　温子
東郷　丞
能岡雅人

◆コントラバス
阿部洋介
大西　功
刈田淳司
河合紀寿
北畠麻由
西永章彦
福原祥公
丸　陽子

◆フルート
川崎裕恵
中澤高師
中島佑介
村上芳明
横田慎吾

◆オーボエ
野口秀樹
進藤　彩
齋藤暁彦
長谷川実里
田村兼一

◆クラリネット
圷ひかり
賀内洋介
西村伸吾
前中悠輔
山下敬司
横地篤志

◆ファゴット
鈴木聖子
冨井一夫
長谷川美奈
越島康太郎
吉倉弘高

◆ホルン
芥川　洋
伊集院正宗
岡田和樹
岡本真哉
桑名久美
山形尚世
小松泰三
倉矢忠和
島　啓
梁川真吾

◆トランペット
家田恭介
金子恭江
桜井　新
七五三直人
田玉詩織

◆トロンボーン
小笠原剛
小林威之
桜井　統
佐藤幸宏
高橋康昭
野口周亮

◆チューバ
植松隆治
小林啓人

◆パーカッション
梶浦未紀
椿康太郎
原島のぞみ
高橋　淳
山本　勲
渡辺麻子

水星交響楽団第４１回定期演奏会のお知らせ

2009年5月9日(土)18:00開演（予定）　すみだトリフォニーホール大ホール
常任指揮者　齊藤栄一氏セレクションプログラム
モーツァルト　交響曲第26番　シューマン　交響曲第2番　R.シュトラウス　家庭交響曲
指揮　齊藤栄一

一橋大学管弦楽団定期コンサート２００８のお知らせ

2008年12月12日(金)　19:00開演　ミューザ川崎シンフォニーホール
ブラームス　交響曲第3番　ドビュッシー　交響詩「海」　ワーグナー　タンホイザー
指揮　宮松重紀